



からつと ピックアップ唐桑人 菅野一代

Pick up
KARATTO

鮪立に盛屋水産がある。波を
被つた自宅をボランティアと共に
に片付け、8月に短期ボランティアの宿泊場所として開放した。
それ以降、学生ボランティアの
鮪立ガレキ撤去作業の拠点とな
っている。鮪立の菅野宅で通称
ツナ カン

「（自宅をボランティアに
ことにに対して）またここに

和享さんが飲みに来る。差し入れも豊富。「お世話になつたみんな」と息の長いつき合いをした

鮪立 ボランティアに自宅を開放し お世話する唐桑人 人情あふれるつき合いが 復興に向けた夢へつながった

「ツナカン」。

ティアのボランティア」となつてい
た一代さん。

自の「おもてなし」精神がそこに
ある。

「なんの仕事した、かんの仕
事したっていうよりも、傍にい
てくれるっていうのは大きいん
だよ。唐桑に入ってくれただけ
で被災者にとっては安心感があ

る」一代さんは想いを巡らせながら自分の想いを口にする。「お金で買えないものってあるつちや? まごころっていうの? そういうつき合いを一番に考えたい。お金は2番目」人の好意とは利害うんぬんでは説明できないことを知る。

「ボランティアにも見返りは必要だ。従業員じゃねえんだ」と語る和享さんは、力キ養殖のお手伝いをした学生たちを船に乗せたりする。学生は大喜び。彼らは養殖体験を通じて力キに興味をもつ。「絶対この力キを食べに来ます」力キだけでなく、ツナカンにも愛着をもつ。唐桑御殿は、都市部から来る学生には珍

しくて仕方ない。そこに一代さんの「おもてなし」が加わるのだ。学生は必ずこう言う。「またここに帰つてきたい」実際、一代さんにはまた会いたくて唐桑に戻つてくる学生も多い。

そこで一代さんは思いつく。力キとツナカンがリンクした瞬間だ。「(ツナカンを)学生が将来

き合えるでしょ」いつまでもボランティアじゃ「遠慮」や「気兼ね」が付き纏う。このプランだと、学生は例えボランティアの作業がなくとも唐桑に帰つてこれる。ツナカンにはきっとカキ以外にもいろんな地元の海の幸が並ぶに違いない。

負けず嫌いだった

被災前は、誰よりも負けず嫌いだった一代さん。「私とばあちゃんは、人に負けるのがホントに嫌で。寝ないでもやりましよう、ヒトが10キロ出すんだつたら、ウチは20キロ出しましょうって、がんばってきた」寝る

自分ができる範囲で
自分のできることを
楽しくやっていきましょうって

